

## *If I Forget Thee, Jerusalem* における記憶と語り

大 地 真 介\*

William Faulkner の第11作目の長編小説 *If I Forget Thee, Jerusalem* は、プロットが異なる二つの物語 “The Wild Palms” と “Old Man” から成っている。“The Wild Palms” は、1930年代後半に医学生 Harry Wilbourne が、ニューオーリンズに住む人妻 Charlotte Rittenmeyer と駆け落ちし、シカゴやウイスコンシン州やユタ州などを転々とした後 Charlotte に中絶手術を施して死なせてしまい、ミシシッピ州の Parchman 刑務所に入れられる物語である。一方、“Old Man” は、作品中で名前が言及されない〈背の高い囚人〉が、三文小説と軽薄な恋人に惑わされて列車強盗を働いた罪で Parchman 刑務所に服役中、“Old Man” と呼ばれるミシシッピ川の大洪水で救助作業に駆り出され、妊娠中の女性を救出して出産を助け、長い漂流の果てに自首して更に十年の刑を宣告されるという物語である。*If I Forget Thee, Jerusalem* は、この “The Wild Palms” と “Old Man” を、それぞれ五章に分けた上で一章ずつ交互に組み合わせている。Faulkner は、この作品構成について、次のように説明した。

That was one story—the story of Charlotte Rittenmeyer and Harry Wilbourne, who sacrificed everything for love, and then lost that. I did not know it would be two separate stories until after I had started the book. When I reached the end of what is now the first section of *The Wild Palms* [*If I Forget Thee, Jerusalem*], I realized suddenly that something was missing, it needed emphasis, something to lift it like counterpoint in music. So I wrote on the “Old Man” story until the “Wild Palms” story rose back to pitch. Then I stopped the “Old Man” story at what is now its first section, and took up the “Wild Palms” story until it began to sag. Then I raised it to pitch again with another section of its antithesis, which is the story of a

---

\* 広島経済大学経済学部講師

man who got his love and spent the rest of the book fleeing from it, even to the extent of voluntarily going back to jail where he would be safe. They are only two stories by chance, perhaps necessity. The story is that of Charlotte and Wilbourne. (Meriwether 247-48)

Faulkner は“*The Wild Palms*”の Harry の物語を「音楽の対位法のように高める」ために“*Old Man*”の〈背の高い囚人〉の物語を書いたわけだが、その対位法的作法は、長い間、出版社や批評家にもあまり理解されなかった。

*If I Forget Thee, Jerusalem* を出版する際、ランダム・ハウス社の Saxe Commins は、二つの物語を統合する *If I Forget Thee, Jerusalem* というタイトルに反対し、Harry の物語“*The Wild Palms*”を作品全体のタイトルにしてしまう。Faulkner は、Commins の編集方針に抗議し、タイトルを元通りにすることを要求するが<sup>(1)</sup>、ランダム・ハウス社の Robert K. Haas も、*If I Forget Thee, Jerusalem* というタイトルは反ユダヤ感情を煽るとして Faulkner の要求を退け (Blotner, *Faulkner* 1002)、結局1939年に *If I Forget Thee, Jerusalem* は、*The Wild Palms* というタイトルで出版される。半世紀後の1990年になってようやく The Library of America がタイトルを *The Wild Palms* から *If I Forget Thee, Jerusalem* に変更し、1995年に Vintage International 版も *If I Forget Thee, Jerusalem* というタイトルを採用するに至る。

*If I Forget Thee, Jerusalem* が1939年に出版された際に書評を担当した批評家達も、その対位法的作法を十分に理解できず、多くの書評が対位法的作法を失敗と見なした。例えば、*Plain Dealer* 紙の Ted Robinson の書評のように、無関係な二つの物語を混合させるのは意味不明だといった意見や (192)、*Saturday Review of Literature* の Ben Ray Redman の書評のように、二つの物語を強引につなぎ合わせることはどちらの物語にとっても不利益だといった意見が多々あった。後に Faulkner を広く世に知らしめる働きをした Malcolm Cowley でさえ、当時の書評において“Except that both of them end in the Mississippi state prison, there is no logical connection between the two stories” (194) として作品構成を問題視しており、1946年に Faulkner 作品集 *Portable Faulkner* を出版する際にも、“*The Wild Palms*”を削って“*Old Man*”だけを採用している。しかし、“*The Wild Palms*”と“*Old Man*”の対照、すなわち文明における不毛な愛と自然によって育まれた無償の愛との対照に関して、Irving Howe 達が次第に深い考察を加えていく。そして1975年に、Thomas L. McHaney の研究書 *William Faulkner's The Wild*

*Palms: A Study* が、二つの物語には細部に至るまで有機的関連性があることを明らかにした。

McHaney の研究書は *If I Forget Thee, Jerusalem* の対位法的技法についての誤解を払拭したわけだが、同書の結論部分には疑問を抱かざるをえない。McHaney の結論の焦点となるのは、“The Wild Palms” 最終章の最後の場面である。その場面では、囚人となった Harry が、Charlotte についての記憶を保持するために自殺を拒否し、次のように述べている。“*Not could. Will. I want to. So it is the old meat after all, no matter how old. Because if memory exists outside of the flesh it wont be memory because it wont know what it remembers so when she became not then half of memory became not and if I become not then all of remembering will cease to be.—Yes he thought Between grief and nothing I will take grief*” (Faulkner 272–73)。この Harry の決意に関して、McHaney は、以下のように結論付けている。

In his narrow bunk, the [tall] convict, Harry’s shadow in this contrapuntal novel, has embraced a narrow faith, while Harry, like Zarathustra, accepts the joy of grief and becomes the master of his world. The convict says No to life; Harry says No to death. No one, least of all William Faulkner, would say that Harry’s decision is simple, but, where the alternative to existence is oblivion, it is the only decision a man who would be a man can make. (*William* 194)

Friedrich Nietzsche の言う〈影〉のような存在に過ぎない〈背の高い囚人〉との対照において、Zarathustra の境地に達した Harry は称揚されている、というのが McHaney の結論だが、〈背の高い囚人〉がそれほど否定的に描かれているとは思えない。先程引用したように、〈背の高い囚人〉は手に入れた愛から逃げようとして自ら進んで刑務所に戻ると Faulkner は言っており、McHaney はこの Faulkner の説明を念頭に置いていると考えられるが、大橋健三郎も述べているように、Harry の物語と〈背の高い囚人〉の物語の対比は、徹底的に女性に関わろうとする男の気持ちと、もう女性はたくさんだと感じて修羅場から逃れようとする男の気持ちの対比とみることができよう (大橋 628)。つまり、Harry と〈背の高い囚人〉の対比は、心の広さと狭さの対比ではなく、女性に対する男のアンビヴァレントな感情を表現しているように思われる。

更に、*If I Forget Thee, Jerusalem* の対位法的作法にはもう一つ重要な役割があると筆者は考える。Harry の物語を「音楽の対位法のように高める」ために〈背の高い囚人〉の物語を書いたと Faulkner は述べているが、対位法である以上、当然“Old Man”にあって“The Wild Palms”にない要素が存在している。テーマに関しては、先程述べたように、文明における不毛な愛に対して自然によって生まれた無償の愛が“Old Man”で提示されており、また、徹底的に女性に関わろうとする男の気持ちに対して女性がらみのトラブルから逃れようとする男の気持ちが“Old Man”で描かれているといえる。“The Wild Palms”と“Old Man”の相違点で他に目立つものは二つあり、それは、“Old Man”の主人公は名前が言及されていないということと、“Old Man”は主人公の回想によって構成されているということであり、この二つの相違点は密接な関係を持っている。

まず、“Old Man”の主人公の無名性について言えば、“The Wild Palms”の主人公の名前は勿論 Harry Wilbourne だが、“Old Man”の主人公は、作品中で名前が言及されることはなく、〈背の高い囚人〉と呼ばれるだけである。ただ、ここで注目したいのは、Harry も、“The Wild Palms”最終章になると突然、次のように、何度も間違った名前と呼ばれ、名無しに等しい存在になっている。“... Listen, Francis... Listen, Francis...” (Faulkner 242). “‘What’s your name? Wilson?’ ‘Yes,’ Wilbourne said” (247). “‘What did you say your name was? Webster?’ ‘Yes,’ Wilbourne said” (251). “‘Come on now, Watson,’ the officer said” (253). “‘Sure, Morrison.’ The officer put his hat back on” (258). 名前を失いつつ Parchman 刑務所の囚人になる Harry は、同時期に同刑務所に服役している無名の〈背の高い囚人〉と最終的に融合しているといえる<sup>(2)</sup>。

Harry と〈背の高い囚人〉の融合は、“The Wild Palms”と“Old Man”の第二の相違点、すなわち“Old Man”の回想形式と深く結び付いている。“The Wild Palms”は総て全知の語り手によって描かれているが、“Old Man”の大部分は、Parchman 刑務所に戻った〈背の高い囚人〉が、大洪水によって引き起こされた七週間の旅のことを回想しながら囚人達に向かって語る形になっている。特に“Old Man”の最終章では、〈背の高い囚人〉の語る様子が強調され、更に、次のように、〈背の高い囚人〉自身も自分が語っていることを意識するようになる。

Then, suddenly and quietly, something—the inarticulateness, the innate and inherited reluctance for speech, dissolved and he found himself, listened to himself, telling it quietly, the words coming not fast but easily to

the tongue as he required them.... (Faulkner 280)

「名前を失いつつ Parchman 刑務所の囚人になる Harry は、同時期に同刑務所に服役している無名の〈背の高い囚人〉と最終的に融合している」と先程述べたが、Harry と〈背の高い囚人〉の融合は、次のような暗示を裏付けている。Harry が自殺を拒否して Charlotte についての記憶を保持しようと決意する “The Wild Palms” 最終章の後で、〈背の高い囚人〉が自分の体験を回想しながら語る様が前景化されて〈背の高い囚人〉自身も自分の語りを意識するようになるということは、Harry も、単に記憶を保持するだけでなく、やがて自分の体験を語り始めることを暗示していると考えられる。実際、Charlotte についての記憶を保持しようという Harry の決意は、彼がその記憶を他者に語ることによって初めて意味をなす。「Charlotte が死んだとき Charlotte についての記憶の半分が無くなり、自分が死ねばその記憶は総て無くなるので、悲しみか無かということであれば、自分は悲しみを選ぼう」と Harry は言って自殺を拒否するわけだが、自殺をするしないに関わらず、命ある者の宿命で Harry もいずれ死ぬ運命なので、Harry が自分の記憶を他者に語らなければ遅かれ早かれ彼の記憶は無くなるはずである。Harry が、〈背の高い囚人〉と同じく、自分の体験・記憶を他者に語ることによって初めて、Harry の記憶が彼の死後も他者の中に残る可能性が出てくるのである。

以上のように、“The Wild Palms” と “Old Man” の二つの主要な相違点、すなわち “Old Man” の主人公の無名性と “Old Man” の回想形式は、Harry も〈背の高い囚人〉と同じく自分の記憶を語るという行為に到達することを示している。従って、“The Wild Palms” と “Old Man” は、ただ単に対比させられているだけでなく、最終的には一つに融合しているといえる。

次に、*If I Forget Thee, Jerusalem* における記憶と語りの意味について深く掘り下げてみたい。“The Wild Palms” と “Old Man” を結び付ける *If I Forget Thee, Jerusalem* というタイトルは、聖書の詩編の137章から取られたものであり、以下の箇所では、バビロンに捕囚されたユダヤ人の悲しみと、聖地エルサレムへの忠誠心が描かれている。

By the rivers of Babylon, there we sat down, yea, we wept, when we remembered Zion.

We hanged our harps upon the willows in the midst thereof.

For there they that carried us away captive required of us a song; and they

that wasted us required of us mirth, saying, Sing us one of the songs of Zion.

How shall we sing the Lord's song in a strange land?

If I forget thee, O Jerusalem, let my right hand forget her cunning.

If I do not remember thee, let my tongue cleave to the roof of my mouth; if I prefer not Jerusalem above my chief joy. (Ps. 137. 1-6)

*If I Forget Thee, Jerusalem* というタイトルの意味については、例えば、Richard Godden などは、生活のためにハリウッドの脚本書きの仕事に縛られていた Faulkner が故郷アメリカ南部を舞台にした小説を書きたいと願う様をタイトルは表していると解釈している (194-95)。また、Cheryl Lester は、同作品のタイトルは Harry や〈背の高い囚人〉の漂泊の旅と結び付いていると述べたり、当時〈洪水〉と呼ばれていた黒人の南部からの移住とユダヤ人のディアスポラとのパラレルを指摘している。同作品のタイトルに関しては様々な解釈が可能だが、Faulkner が *If I Forget Thee, Jerusalem* を執筆した理由とタイトルとの関係に注目してみたい。Faulkner は “I wrote THE WILD PALMS [*If I Forget Thee, Jerusalem*] in order to try to stave off what I thought was heart-break” (Blotner, *Selected Letters* 338) と説明しているが、その「失恋の悲しみ」とは、Karl Zender や多くの批評家が指摘するように、Faulkner が *If I Forget Thee, Jerusalem* 執筆前に体験した失恋のことである (Zender 60)。Faulkner は、ハリウッドで映画監督 Howard Hawks の秘書 Meta Carpenter と愛し合うようになるが、Faulkner が妻帯者であったために Meta と結婚できず、*If I Forget Thee, Jerusalem* 執筆前にいったん別れている。従って、*If I Forget Thee, Jerusalem* というタイトルの「汝」というのは直接的には Meta のことを指しており、同タイトルは、失恋相手の女性を忘れまいとする男の愛憎入り混じったアンビヴァレントな感情と結び付いているといえる。その両極端な感情が、死に別れた Charlotte に対する Harry の愛情と、自分を惑わした挙句に別の男と結婚した恋人に対する〈背の高い囚人〉の憎悪という対照的な構図によって作品中で表現されているのである。

Charlotte についての記憶を保持しようという Harry の独白の箇所は、実は Marcel Proust の『失われた時を求めて』の文章を基にしている。Thomas McHaney は、前に触れた *William Faulkner's The Wild Palms* とは別の論文 “Faulkner's Cosmos and the Incarnation of History in *Light in August*” において、『失われた時を求めて』の最終編「見出された時」が出版された1927年に

Faulkner は同作品を読んでいたと推察している。1927年に出版された Faulkner の *Mosquitoes* には『失われた時を求めて』で用いられたベルのイメージが三度登場しており、Faulkner が1927年に書き上げた *Flags in the Dust* 以降の作品は Proust の時間の概念に基づいていると McHaney は考える。『失われた時を求めて』から引用しつつ、McHaney は、Proust の時間の概念を次のように要約している。“Proust’s narrator realizes that the bell tinkling in the deep past is still there, and that ‘between it and the present moment, all the infinitely unrolling past which I had been unconsciously carrying within me’ is present also” (“Faulkner’s Cosmos” 329). Faulkner は、*Flags in the Dust* 以降の作品における時間の意味について、次のように説明している。

I can move these people around like God, not only in space but in time too... [This] proves to me my own theory that time is a fluid condition which has no existence except in the momentary avatars of individual people. There is no such thing as *was*—only *is*. If *was* existed there would be no grief or sorrow. (Meriwether 255)

McHaney の言うように、Faulkner の時間の概念は Proust のそれと同質のものである。そして、McHaney は、Charlotte についての記憶を保持しようという Harry の独白の文章が『失われた時を求めて』の最終編「見出された時」の結末の文章を基にしていることを指摘する。

Because they ... contain all the hours of days gone by ... human bodies can do such injury to those who love them, because they contain so many past memories, joys and desires. [After death,] Time withdraws from the body, and the memories—so pale and insignificant—are effaced from her who no longer exists, and soon will be from him whom they still torture, and the memories themselves will perish in the end when the desire of a living body is no longer there to keep them alive. (Proust 1123)

確かに、この『失われた時を求めて』の記憶に関する文章の趣旨は、Harry の独白のそれと基本的に同じである。

Faulkner は、Proust の『失われた時を求めて』について、“I feel very close to

Proust. After I had read *A la Recherche du Temps Perdu* I said ‘This is it!’ —and I wished I had written it myself” (Meriwether 72) と述べているが、*If I Forget Thee, Jerusalem* は Faulkner 版『失われた時を求めて』だと筆者は考える。実際、*If I Forget Thee, Jerusalem* と『失われた時を求めて』は、記憶に関する文章だけでなく、作品のテーマも非常によく似ている。『失われた時を求めて』は、簡潔に言えば、語り手である主人公が、自分が保持している記憶を語ること——小説にすること——に目覚める小説であり、一種のメタフィクションである。同様に、*If I Forget Thee, Jerusalem* も主人公達が自分達の体験・記憶を語ることに目覚める物語であり、特に、以前小説を書いていた Harry は、Charlotte についての記憶を小説化すると考えられる。

『失われた時を求めて』と *If I Forget Thee, Jerusalem* の接点に関して興味深い文章が、『失われた時を求めて』の最終編「見出された時」の中程にある。それは、主人公が、Guermantes 大公邸の中庭で不揃いな敷石を踏んだことによって記憶の意義を確認した後、失恋の悲しみについて考察する場面である。

And when we endeavour to extract the general qualities from our sorrow and to write about it, we are somewhat consoled, perhaps for a still different reason from any of those I have given here, which is that thinking in terms of generalities and writing comprise for the writer a healthful and indispensable function, the fulfilling of which brings happiness, as do for a man of a physical type exercise, sweating and the bath... [W]e have to represent it [our sorrow] to ourselves in a general form and this enables us to a certain extent to escape its strangling grip, makes the whole world share in our suffering with us and is not without even a certain joy. (Proust 1018–19)

Faulkner は「失恋の悲しみを癒すために *If I Forget Thee, Jerusalem* を書いた」と述べたが、正に Faulkner は、『失われたときを求めて』の主人公の失恋克服法を実践しているといえる。ホモセクシャルの Proust は、Alfred Agostinelli という男に対して失恋をするが、Alfred に対する失恋の悲しみを和らげることを一つの目的として、『失われた時を求めて』を書き、自分の失恋体験を、Albertine という女性に対する主人公の失恋という形に昇華したわけだが、同様に Faulkner も、Meta Carpenter に対する失恋の悲しみを克服するために、*If I Forget Thee,*



*Jerusalem* を書き、自分の失恋を、Harry の失恋と〈背の高い囚人〉の失恋として昇華させたのである。『失われた時を求めて』で主人公に名前が無いのも、*If I Forget Thee, Jerusalem* において〈背の高い囚人〉に名前が無く Harry の名前も無くなっていくのも、Proust と Faulkner が、自分の悲しみ・記憶を「普遍的な形」にしようとしたからだといえる。<sup>(3)</sup>

以上述べてきたように、*If I Forget Thee, Jerusalem* は、Proust のメタフィクション『失われた時を求めて』の記憶と語りのテーマと同様なテーマを扱っており、そのテーマを対位法的手法という Faulkner 独自の斬新な技法によって捉え直しているのである。

## 注

\* 本稿は、中・四国アメリカ文学会第二十八回大会（1999年6月19日、於ホテルニューオカヤマ）で口頭発表したものに加筆修正を施したものである。

- (1) Faulkner が書いた抗議の手紙の内容は、以下の通りである。“The movies could change it as they did Sanctuary, and I think it is a good title. It invented itself as a title for the chapter in which Charlotte died and where Wilbourne said ‘Between grief and nothing I will take grief’ and which is the theme of the whole book, the convict story being just counterpoint to sharpen it, just as ‘The Unvanquished’ was the title of the story of Granny’s struggle between her morality and her children’s needs, which was the theme of that book and which we extended to cover the whole book successfully. Dont you think this title might do the same?” (Blotner, *Selected Letters* 106)
- (2) Harry は1938年に50年の刑を受けており、〈背の高い囚人〉は1935年に出所予定だったが10年の刑を追加される。従って、二人は Parchman 刑務所に同時期に服役することになる。
- (3) 『失われた時を求めて』全7編中、第5編「囚われの女」で“Marcel”という名前が二度だけ出てくるが、これは Proust の間違いであって『失われた時を求めて』の主人公は名前の無い登場人物だと考えられている（鈴木 827）。

## 引用文献

- Blotner, Joseph L. *Faulkner: A Biography*. Vol. 2. New York: Random House, 1974.  
 ———, ed. *Selected Letters of William Faulkner*. New York: Vintage Books, 1987.  
 Cowley, Malcolm. “Sanctuary.” Inge 194–95.  
 Faulkner, William. *If I Forget Thee, Jerusalem [The Wild Palms]*. New York: Vintage International, 1995.  
 Godden, Richard. *Fictions of Labor: William Faulkner and the South’s Long Revolution*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.  
 Howe, Irving. *William Faulkner: A Critical Study*. Rev. ed. New York: Vintage Books,

- 1962.
- Inge, Thomas M., ed. *William Faulkner: The Contemporary Reviews*. Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- Lester, Cheryl. "If I Forget Thee, Jerusalem and the Great Migration: History in Black and White." *Faulkner and Cultural Context: Faulkner and Yoknapatawpha*, 1995. Ed. Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1997. 191-217.
- McHaney, Thomas L. "Faulkner's Cosmos and the Incarnation of History in *Light in August*." *Rewriting the South: History and Fiction*. Ed. Lothar Hönnighausen and Valeria Gennaro Lerda. Transatlantic Perspectives 3. Tübingen: Franke Verlag, 1993. 324-34.
- . *William Faulkner's The Wild Palms: A Study*. Jackson: UP of Mississippi, 1975.
- Meriwether, James B., and Michael Millgate, eds. *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner, 1926-1962*. Lincoln: U of Nebraska P, 1968.
- 大橋健三郎. 『ウイリアム・フォークナー研究』. 増補版. 東京: 南雲堂, 1996.
- Proust, Marcel. *Remembrance of Things Past*. Trans. C. K. Scott Moncrieff and Frederick A. Blossom. Vol. 2. New York: Random House, 1932.
- Redman, Ben Ray. "Faulkner's Double Novel." *Saturday Review of Literature* 21 Jan. 1939: 5.
- Robinson, Ted. "Some of Faulkner's Best and Worst Found in *The Wild Palms*." Inge 191-92.
- 鈴木道彦. 「マルセル・ブルースト」. 『世界文学大事典』. 第3巻. 東京: 集英社, 1997. 818-28.
- Zender, Karl F. *The Crossing of the Ways: William Faulkner, the South, and the Modern World*. New Brunswick: Rutgers UP, 1989.